特集「インタラクションの理解および基盤・応用技術」の編集にあたって

寺田 努[1,a)]

1997 年より毎年開催されているシンポジウム「インタラクション」は，ユーザインタフェース，CSCW，可視化，入出力デバイス，仮想/拡張現実，ユビキタスコンピューティング，ソフトウェア工学といった計算機科学，さらには認知科学，社会科学，文化人類学，メディア論，芸術といった人文科学の，研究者および実務者が一堂に会し，インタラクションに関わる最新の技術や情報を交換し議論する場を提供してきました．主催は本学会ヒューマンコンピュータインタラクション研究会，グループウェアとネットワークサービス研究会，ユビキタスコンピューティングシステム研究会，エンタテインメントコンピューティング研究会の 4 研究会となっています．インタラクション 2013 は 18 件の一般講演発表，165 件のインタラクティブ発表が行われ，650 名の有料参加者を集めました．

このような多様な分野にまたがるインタラクション技術に関する論文をまとめ，かつ進歩の早いインタラクション分野の論文を迅速に提供することを目指し，インタラクション 2013 の開催に合わせて特集号を計画しました．ゲストエディタにはインタラクション 2013 のプログラム委員長を務めた筆者が就任し，インタラクション 2013 のプログラム委員ほかインタラクション研究に関わりの深い研究者らを編集委員として迎えました．投稿数は 39 件であり，そのうち特に優れた 15 件を採録としました．

インタラクションシンポジウムは毎年改革を繰り返し，よりよい会議のあり方を模索し続けています．一方，インタラクションに関連して発行されている本特集号も回を重ね，その成熟度は高まりつつあると筆者は考えています．したがって，特集号を編集するにあたっても，これまでに運用されてきたポリシを吟味し，継続的に価値のある特集号が出版される基盤作りをすることを目標としました．その 1 つとして，本特集号編集会議では条件付き採録にする条件である「採録のための条件が明確であること」「その条件が短時間でクリア可能であること」に特に気を遣って議論を行うこととしました．この観点から，当初不採録と判定されたものも上記 2 点を満たすと判断され，最終的に採録判定となるものが複数件存在するなど，編集委員会の議論の果たした役割は大きかったといえます．

インタラクションという分野は多岐にわたり，分野の最新動向を追い続けるのが難しくなりつつあります．本特集号が，同分野の研究に従事している読者が最新の研究動向を知るために，または「インタラクション」という研究対象の全体像に興味がある分野外の読者にとって，価値があるものになったと確信しています．また，本特集号を通して，インタラクションシンポジウムにも興味を持っていただき，ぜひ活発な論文投稿および参加を行っていただけることを期待しています．

最後に，ご投稿いただいた著者の皆様，丁寧な査読や議論にご尽力いただいた査読者と特集号編集委員会の皆様，本特集号の機会を与えていただき編集を支援いただいた論文誌編集委員会と学会事務局の皆様に深く感謝します．

「インタラクションの理解および基盤・応用技術」特集号編集委員会

- ゲストエディタ
  寺田　努（神戸大）
- 編集幹事
  水口　充（京都産業大），吉高淳夫（北陸先端大）
- 編集委員
  鈴木健嗣（筑波大），宮下芳明（明治大），秋田純一（金沢大），綾塚祐二（電通国際），井上智雄（筑波大），江渡浩一郎（産総研），岡本昌之（東芝），小野哲雄（北海道大），加藤直樹（東京学芸大），河野恭之（関西学院大），後藤真孝（産総研），志筑文太郎（筑波大），苗村　健（東京大），中西英之（大阪大），藤波香織（東京農工大），細部博史（情報学研），三浦元喜（九州工大），迎山和司（はこだて未来大）

1　神戸大学
Kobe University, Kobe, Hyogo 657–8501, Japan
a)　tsutomu@eedept.kobe-u.ac.jp

© 2014 Information Processing Society of Japan